

(2) 国内の事例

河川



ビオトープを整備する前の河川敷には、生物の少ない平坦な麦畑が広がっていた。(埼玉県)



川の入江を整備して3年半後のビオトープ。魚が卵を産むための植物が生えやすいように、水ぎわをなだらかにするなどの工夫をしている。



川と河岸がエコトーンによって生態的な連続性を持ち、野生生物が生息、生育しやすい環境をつくり出している。

また、創出された「瀬」や「淵」は川の流れに多様性を持たせ、様々な生物の生息を可能にしている。河畔林づくりには地元の樹木が用いられている。(徳島県)

学 校



小学校の横に位置するコンクリート護岸の用水路を、市が自然に近い形に復元。同校は市との協力体制のもと、学校のフェンスを取りはずし、用水路の一部を学校内に引き込んで「とんぼ池」(写真右下)をつくった。学校の外の自然と学校ビオトープをネットワークさせた事例。(東京都)



用水路を学校内に引き込んでつくられたとんぼ池。



整備前。園芸品種が植栽されている。(埼玉県)



ビオトープの整備から3ヶ月後には、土が草で覆われている状態になった。



ビオトープを整備してから2年後の夏。遠目からは、観察路は見えなくなるほど、草木が生い茂っているが、子どもたちが歩けるように管理されている。



地域住民や区の協力のもと、子どもたちが積極的に計画、創出、管理している事例。草地、池、雑木林などがつくられ、なかでも雑木林の創出にあたっては、校舎の建て替え時に出た土などを利用し、子どもたちが家庭で育てた苗木を植えるといった工夫をこらした。(東京都)



7,000㎡の広い学校林があり、隣接する市民の森との間にも柵がなく自由に行き来できるように開放している。学校林に沿った長さ40メートルの小川を、子どもたちからのアイデアを集めて設計し、PTAと子どもたちが中心になって整備した。(千葉県)

住民による取り組み



民間団体の手によりつくられた「トンボの里・ビオトープ相栗」。約1,000㎡の休耕田(棚田)を利用してトンボ池を復元した。池の水は湧水を利用している。(徳島県)



ビオトープ公園「めだかの里」は、ショッピングセンターが無料提供した県道近くの敷地を利用して、住民、企業、行政の協働でつくられた。(徳島県)

◇エコロジカルネットワーク

- ・オランダでは1990年に「国土エコロジカルネットワーク構想」を策定しています。この構想では、コアエリア（全国レベルで生態学的に重要なエリア）、自然環境改善エリア（改善することによりコアエリアと同等の生態的な価値を持たせるエリア）、エコロジカルコリドー（コアエリアと自然環境改善エリアを繋ぐことにより、野生生物の分散移動を容易にし、地域の生態的安定性を高めることに貢献するエリア）が地図上に示され、失われた生物多様性を回復するために様々な施策が実行に移されています。
- ・この構想をヨーロッパ大陸全土に広げたものがE C（現E U：ヨーロッパ連合）が公的に承認している「ヨーロッパエコロジカルネットワーク構想」です。この構想を受けて、ベルギー（フランダース地方）においても、「フランダースエコロジカルネットワーク構想」が策定されています。
- ・エコロジカルネットワークは東欧（リトアニア、エストニアなど）やアメリカ、コスタリカでも進められています。

